

2019年11月3日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「主の言葉が臨む」～首里城焼失の悲しみを越えて～

聖書：ゼカリヤ書9:1～10

先日、首里城が焼失した。これは夢なのか、悪夢なのかと、疑いたくなるような情景に動揺を隠しきれない。改めて首里城は、沖縄人の心の支柱であったことを思われる。新聞に多くの県民の言葉が記されたが、その一人、吉嶺さんは、すぐに祖母の言葉を思い出したと言う。1945年4月、祖母ウシさんは、米軍の攻撃で首里城が燃えているのを見て、「ぐしくが燃(む)えとーさー」(お城が燃えている)と手を合わせ泣いていたと言う。城が燃え夜まで空が真っ赤に染まった。当時13歳だった吉嶺さんの自宅はその2日後に米軍の爆撃で焼失する。その時は祖母は泣かなかったのを覚えていると言う。自分の家よりも“首里城を思う”というところに歴史の重さ、心の支柱を感じさせられる。孫の吉嶺さんも、祖母の言葉を思い出し「ぐしくが燃えとーさー」と声を上げずにいられなかった。

首里城は、琉球時代からの歴史を常に漂わせ、私たち沖縄の現代に生きる者に、アイデンティティーを、自分は何者であるのかを、問い、教えるものであったりする。ゆえにこれまで4度、焼失するという歴史の中で、必ず復元することになる。玉城デニー知事は、すぐに「必ず復元します」と宣言した。本当にそうあって欲しいと祈る。

今朝はゼカリヤ書から学ぶ。時代背景はユダの民がバビロン捕囚から解放され、故郷パレスチナ地方、エルサレムに帰って来たところの話。しかしすでに異民族が住み着き、異教徒の習慣による異質な状態がそこにはあった。帰ってきたものの希望が見えない。民の心のよりどころ、精神的支柱であるエルサレム神殿は、戦争で破壊され再建のめどは見えてこない。そのような状況の中で、預言者ゼカリヤの託宣が示された。主の言葉がその地に臨んだ。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。…ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って」。失望の只中に置かれている民に力強い希望の言葉が語られている。この言葉は、必ずそのようになる約束の言葉、先取りした喜び、先取りした勝利の宣言がそこにあるということ。

この託宣の後、エルサレム神殿の復元が成されて行く。エルサレム神殿もこれまで戦争のたびに崩壊してきたが、しかし必ず復元している。今回の首里城の炎上、崩壊は、エルサレム神殿の崩壊と重なるように思えた。ユダヤの民が、エルサレム神殿の崩壊にどれほどの悲しみ、失望感に陥ったことか、首里城の炎上、崩壊の状況から重なる。ゆえに首里城は必ず復元する。そのことを重ねて祈りたい。主の言葉が臨む。(神谷)